

星の花が降るころに

安東 みきえ



- 「目標」
- 比喩の表現について理解して、描かれている内容を想像する。
 - 場面と場面、場面と人物などの描写を結び付けて、作品を読み深める。

銀木犀の花は甘い香り^{ぎんもくせい}で、白く小さな星の形をしている。そして雪が降るように音もなく落ちてくる。去年の秋、夏実と二人で木の真下に立ち、花が散るのを長いこと見上げていた。気がつく^{なつみ}と、地面が白い星形でいっぱいになっていた。これじゃふめない、これじゃもう動けない、と夏実は幹に体を寄せ、二人で木に閉じ込められた、そう言って笑った。

5

——ガタン！

びっくりした。去年のことをぼんやり思い出していたら、机にいきなり戸部君がぶつかってきた。戸部君は振り返ると、後ろの男子に向かってどなった。

「やめろよ。押すなよなあ。俺がわざとぶつかったみたいだろ。」

自習時間が終わり、昼休みに入った教室はがやがやしていた。

10

10 漢 押 おす
俺 おれ



1 銀木犀 モクセイ科の常緑小高木。秋に白い小花を多数咲かせ、強い香りを放つ。

私は戸部君をにらんだ。

「なんか用？」

「宿題をきこうと思って来たんだよ。そしたらあいづらがいきなり押してきて。」戸部君はサッカー部のだれかいつもふざけてじゃれ合っている。そしてちよっとしたこづき合いが高じてすぐに本気のけんかになる。わけがわからない。

5

塾のプリントを、戸部君は私の前に差し出した。

「この問題わかんねえんだよ。『あたかも』という言葉を使って文章を作りなさい、だって。おまえ得意だろ、こういうの。」

私だってわからない。いっしょだった小学生のころからわからないままだ。なんで戸部君はいつも私にからんでくるのか。なんで同じ塾に入ってくるのか。なんでサッカー部なのに先輩のように格好よくないのか。

10

「わかんないよ。そんなの自分で考えなよ。」

隣の教室の授業も終わったらしく、椅子を引く音がガタガタと聞こえてきた。私は戸部君を押しのけるようにして立ち上がると廊下に向かった。

15

戸部君に関わり合っている暇はない。今日こそは仲直りをする^{けいじ}と決めてきたのだ。はられたポスターや掲示を眺めるふりをしながら、廊下で夏実が出てくるのを待った。

5 高じる 意
6 漢 塾 ジュク
11 漢 輩 ハイ
14 漢 廊 ロウ
16 漢 眺 チョウ

塾 ジュク
先輩 バイ
廊下 ロウ
眺める チョウ

夏実とは中学に上がってもずっと親友でいようと約束をしていた。だから春の間はクラスが違っても必ずいっしょに帰っていた。それなのに、何度か小さな擦れ違いや誤解が重なるうち、別々に帰るようになってしまった。おたがいに意地を張っていたのかもしれない。

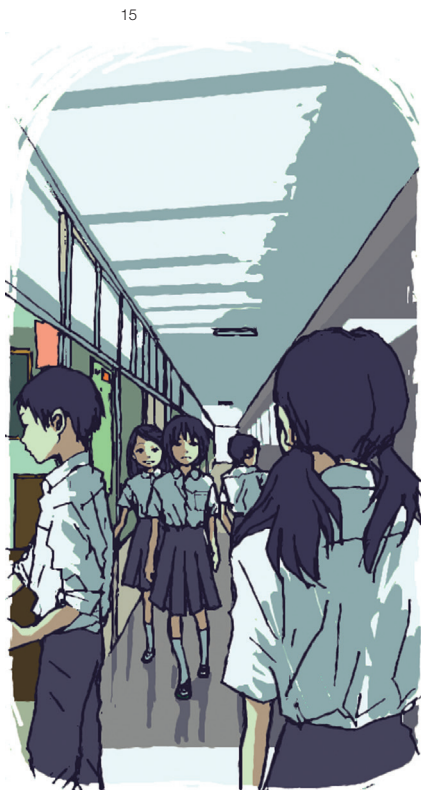
お守りみたいな小さなビニール袋をポケットの上からそととまでた。中には銀木犀の花が入っている。もう香りはなくなっているけれどもかわらない。去年の秋、この花で何か手作りに挑戦しようと言ってそのままになっていた。香水はもう無理でも試しにせっけんを作ってみよう、そして秋になったら新しい花を拾って、それでポプリなんかも作ってみよう……そう誘ってみるつもりだった。夏実だつて、私から言いだすのをきくと待っているはずだ。

夏実の姿が目に入った。教室を出てこちらに向かつてくる。

そのとたん、私は自分の心臓がどこにあるのかはつきりわかった。どきどき鳴る胸をなだめるように一つ息を吸ってはくと、ぎこちなく足をふみ出した。

「あの、夏実——」

私が声をかけたのと、隣のクラスの子が夏実に話し



9 ポプリ 芳香のある草花を乾燥させたもの。香りを楽しむために、袋などにつめて用いる。

3 誤解意

3 意地を張る意

14 なだめる意

7 漢 挑 チョウ
いどむ 挑戦

7 音 香水(コウスイ)

9 漢 誘 ユウ
さそう 誘う

かけたのが同時だった。夏実は一瞬とまどったような顔でこちらを見た後、隣の子に何か答えながら私からずっと顔を背けた。そして目の前を通り過ぎて行ってしまった。音のないこま送りの映像を見ているように、変に長く感じられた。騒々しさがやっと耳に戻ったとき、教室の中の戸部君がこちらを見ていることに気づいた。私はきつとひどい顔をしている。唇がふるえているし、目のふちが熱い。きまりが悪くてはじかれたようにその場を離れると、窓に駆け寄って下をのぞいた。裏門にも、コンクリートの通路にも人の姿はない。どこも強い日差しで、色が飛んでしまったみたい。貧血を起こしたときに見える白々とした光景によく似ている。

私は外にいる友達を探しているふうに熱心に下を眺めた。本当は友達なんていないのに。夏実の他には友達とよびたい人なんてだれもないのに。

帰りは図書委員の集まりがあったせいで遅くなった。のろのろと靴を履きかえしていると、校庭からサッカー部のかけ声が聞こえてきた。

もう九月というのに、昨日も真夏日だった。校庭に出ると、毛穴という毛穴から魂がぬるぬると溶け出してしまいそうに暑かった。

運動部のみんなはサバンの動物みたいで、入れかわり立ちかわり水を飲み

17 サバナ 熱帯・亜熱帯地方の草原。雨季と乾季がはっきりと分かれている。サバナともいう。

1 とまどう 文

6 きまりが悪い意

2 訓 背ける(そむける)

4 漢 騒 ソウ
さわぐ 騒々しさ

5 漢 唇 シン
くちびる 唇

6 漢 駆 ク
かける 駆け寄る

8 音 貧血(ヒンケツ)

13 漢 遅 オク
おくれる 遅い

16 漢 魂 コン
たましい 魂

やって来る。水飲み場の近くに座って戸部君を探した。夏実とのかを見られたのが気がかりだった。繊細^{せんさい}さのかけらもない戸部君だから、みんなの前で何を言いだすか知れたものじゃない。どこまでわかっているのか探っておきたかった。だいたいなんてあんな場面をのんびりと眺めていたのだろう。それを考えると弱みをにぎられた気分になり、八つ当たりとわかってても憎らしくてしかたがなかった。

戸部君の姿がやっと見つかった。

なかなか探せないはずだ。サッカーの練習をしているみんなとは離れた所で、一人ボールを磨いていた。

サッカーボールはぬい目が弱い。そこからほころびる。だから砂を落としてやらないとだめなんだ。使いたいときだけ使って、手入れをしないのはだめなんだ。いつか戸部君がそう言っていたのを思い出した。

日陰もない校庭の隅っこで背中を丸め、黙々とボール磨きをしている戸部君を見ていたら、なんだか急に自分の考えていたことがひどく小さく、くだらないことに思えてきた。

立ち上がって水道の蛇口^{じゃぐち}をひねった。水をぱしゃぱしゃと顔にかけた。冷たかった。溶け出していた魂がもう一度引っ込み、やっと顔の輪郭^{りんかく}が戻ってきたよ

5

10

15

2 繊細意

17 輪郭意

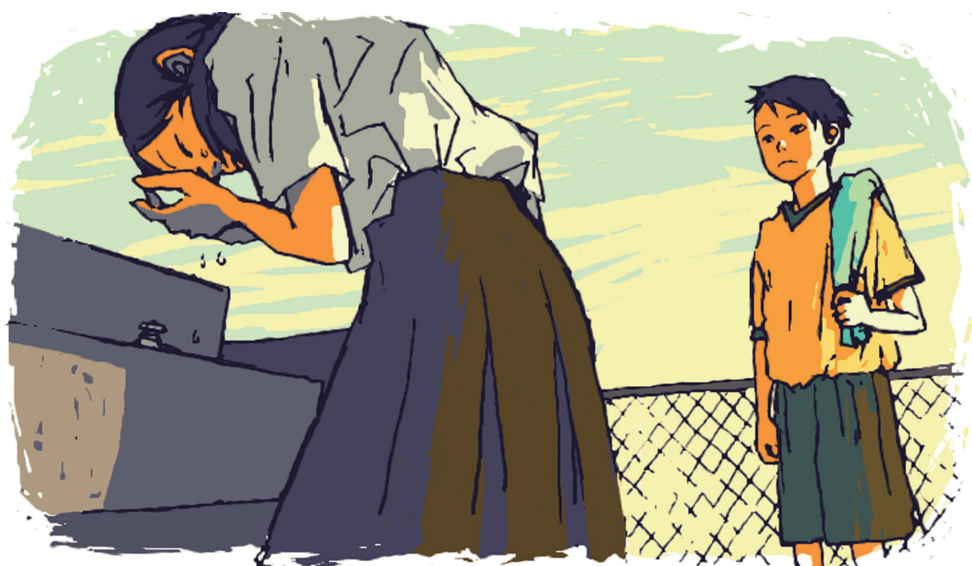
3 訓 探る(さぐる)

5 漢 憎

憎らしい

13 漢 陰

日陰



うな気がした。

てのひらに水を受けて何度もほおをたたいていると、足音が近づいてきた。後ろから「おい。」と声をかけられた。戸部君だ。ずっと耳になじんでいた声だからすぐわかる。

顔を拭きながら振り返ると、戸部君が言った。

「俺、考えたんだ。」

ハンドタオルから目だけを出して戸部君を見つめた。何を言われるのか少し怖くて黙っていた。

「ほら、『あたかも』という言葉を使って文を作りなさいってやつ。」

「ああ、なんだ。あれのこと。」

「いいか、よく聞けよ……おまえは俺を意外とハンサムだと思ったことが――」

5

10

15

5 なじむ 文

17 意外類

7 漢 拭

拭く

にやりと笑った。「——あたかもしれない。」

やっぱり戸部君って、わけがわからない。

二人で顔を見合わせてふき出した。中学生になってちゃんと向き合ったことがなかったから気づかなかったけれど、私より低かったはずの戸部君の背はいつのまにか私よりずっと高くなっている。

私はタオルを当てて笑っていた。涙がにじんできたのはあんまり笑いすぎたせいだ、たぶん。

学校からの帰り、少し回り道をして銀木犀のある公園に立ち寄った。

銀木犀は常緑樹だから一年中葉っぱがしげっている。それをきれいに丸く刈り込むので、木の下に入れば丸屋根の部屋のような。夏実と私はここが大好きで、二人だけの秘密基地と決めていた。ここにいれば大丈夫、どんなことから木が守ってくれる。そう信じていられた。

夕方に近くなっても日差しはまだ強い。木の下は陰になって涼しかった。

掃除をしているおばさんが、草むしりの手を休めて話しかけてきた。

「いい木だねえ、こんな時期は木陰になってくれて。けど春先は、葉っぱが落ちて案外厄介なんだよ、掃除がさ。」

10 常緑樹 一年中、緑の葉を付けている樹木。

6 にじむ 文

6 漢 涙 なみだ

10 漢 刈 か

12 漢 丈 たけ

15 漢 掃 はく

17 漢 厄 ヤク

涙

刈り込む

大丈夫

掃除

厄介

私は首をかしげた。常緑樹は一年中葉っぱがしげっているはずなのに。

「え、葉っぱはずっと落ちないんじゃないんですか。」

「まさか。どんどん古い葉っぱを落っことして、その代わりに新しい葉っぱを生やすんだよ。そりゃそうさ。でなきゃあんた、いくら木だって生きていけないよ。」

帽子の中の顔は暗くてよくわからなかったけれど、笑った歯だけは白く見えた。おばさんは、よいしょと言って掃除道具を抱えると公園の反対側に歩いていった。私は真下に立って銀木犀の木を見上げた。

かたむいた陽が葉っぱの間からちらちらと差し、半円球の宙にまたたく星みたいに光っていた。

ポケットからビニール袋を取り出した。花びらは小さく縮んで、もう色がすっかりあせている。

袋の口を開けて、星形の花を土の上にぱらぱらと落とした。

ここであつたかまた夏実と花を拾える日が来るかもしれない。それとも違うだれかと拾うかもしれない。あるいはそんなことはもうしないかもしれない。

どちらだっていい。大丈夫、きっとなんとかやっていける。

私は銀木犀の木の下をくぐって出た。

スカイエマ・絵

広がる読書

「頭のうちどころが悪かった熊の話」安東みきえ



頭のうちどころが悪かった熊の話

「夕暮れのマグノリア」安東みきえ



夕暮れのマグノリア

1 首をかしげる

関 首を縦に振る

首を横に振る

首をひねる

8 またたく 意

5 漢 帽 ボウ

帽子

6 漢 抱 だく

抱える